

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

「濃霧のあとのミスター・パーフェクト」

2018 ARTA DIGITAL Rd.2 FUJI 500km

FUJI MEISTER' S PERFECT GAME

暴風雨のあとに立ちこめていた濃い霧は、あっという間に晴れて冠雪した富士山の雄姿が見えてきた。

それと同時に富士スピードウェイにはエキゾーストノートが響き渡った。ディレイの影響で1セッションのみとされた予選で圧倒的な速さを見せたのは、GT300クラスを戦う55号車 ARTA BMW M6 GT3 の高木真一だった。フリー走行と同じく予選もトップ。高木はGT300クラス通算最多タイとなる13回目のポールポジションを余裕で掴み獲った。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

勝って当たり前。

そんな周りからの目に、高木にプレッシャーがないわけではなかった。

しかしあくまでいつものように飄々と、プレッシャーなど感じていないと自分に言い聞かせるようにコクピットに乗り込み、500kmの長丁場へと臨んでいった。

エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市も、それを知ってか知らずかいつもと同じように接した。



土屋「風がかなり強いから、自分にちゃんと風を当ててね。ブレーキとタイヤ、しっかり熱を入れてよ」

高木「頑張りまーす。頑張ってくださいよ〜」

土屋「頼むよ、真一！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

スタートから順調に首位を守り後続とのギャップを広げていく 55号車の姿を、レースエンジニアの安藤博之も落ち着いて見守っていた。安藤が読み上げる後方とのギャップは、じわじわと広がっていく。

高木「後ろとのギャップだけたまに教えてね」

安藤「2.6秒、後ろは38秒台中盤で走ってます」

高木は次にステアリングを握るシヨン・ウォーキンシヨンのことも考えて、ABSのセッティングやタイヤの内圧などを注視しながらドライビングに役立つ情報を逐一無線で伝えていく。そんな中でも時折ポンと速いタイムを刻んだりする。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

土屋「真一だけ 38 秒台、あとは速いのも 39 秒後半だよ」
高木「了解。クルマはムチャクチャ速いんで、アタックするとそれくらい出ちゃうよ」

ピットインのタイミングを図ってみたり、タイヤ無交換作戦に挑戦してみたり、いつもならばひとつでもポジションを上げるために様々な挑戦をするものだ。しかしこの日はそんな挑戦すらひとつも必要なかった。当初の予定通りの周回数でピットインし、普通にマージンを持ってタイヤ交換するだけで良かった。

そのくらい、この日の 55 号車は圧倒的に速かったのだ。





AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



高木は予定通りションにドライバーチェンジを行ない、
安藤「タイヤウォームアップをマネジメントしてくれ」

SW「了解」

安藤「2位のクルマに対して15秒ギャップがあるよ」

高木からマシンを受け継いだションも好ペースで走行し、後続とのギャップをキープしていく。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

すると2位のBRZがマシントラブルでストップし、後続とのギャップはさらに広がった。2回目のピットストップではリアだけ交換することを考えていたARTAだったが、充分に4輪とも交換だけの余裕が出て来た。安藤「良いペースだ、他は39秒5で走っている」
SW「ペースを上げた方が良い？」

安藤「このペースをキープしてくれ。2位のマシンが止まった。
これで2位とのギャップは26秒になったよ」

SW「リアタイヤは換えてくれ。ソフトタイヤに交換だ」

安藤「分かってる、4輪とも交換するつもりだよ」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



一方、GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT は、開幕戦岡山とは違いセットアップが上手く決めきれずに 13 位に低迷した。

しかし 13 番グリッドからスタートした 8 号車は伊沢拓也がスタートドライバーを務め、少しずつポジションを上げていった。

セットアップ変更の甲斐あって、純粋なペース自体は予選ほど悪くない。トップからのタイムギャップもそれほど大きいわけではない。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

しかし遅いマシンに引っかかるうちに1周
1秒ずつ引き離されていってしまう場面が
何度かあり、

それがレース展開に影響してしまう。

伊沢「コーナーのミッドで頑張ると前も後
ろもないんで、ブレーキで止めきって曲がっ
ていけば普通に走れるかな」

星「トップ39号車までギャップ13.5秒。
あと10周くらい。ここが頑張りどころです」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

星「トップ39号車までギャップ13.5秒。あと10周くらい。ここが頑張りどころです」
伊沢は35周目にピットインし野尻智紀にドライバー交代を行なう。
500kmの長丁場とはいえ、前後の間隔は詰まっていて争いは激しい。
気を抜いている暇は無かった。

野尻「前は何秒先？」

星「前は6号車、12秒先。31秒中盤くらいで走ってる。後ろは1号車に変わってる。
ここが頑張りどころだからね、頑張っついていこう」

野尻「了解」

星「ペースは良さそうだけど、どう？」

野尻「悪くないけど、そんなに良いわけじゃないよ。セクター2とか結構キツイ」

星「了解、予定よりは少し長めに行こうと思う」

野尻「了解。内圧が下がってきた。陽射しがなくなると良くないね」
燃料が軽くなってくるとペースは良く、

野尻は74周目にピットインするまで好ペースで走行を続けた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



そして最後に再び伊沢がコクピットへ。8位で戦列に戻り、トップと同等の速さで前を追いかけていく。

星「ソフトタイヤで行きます、30周頑張ってください。前とのギャップ8.5秒」

伊沢「了解。他は何秒くらいで走ってる？」

星「31秒台が多いね、100号車が31秒6。伊沢くんはかなり良いペースだよ、さっきはセクター3が全体のベストだった」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



レースも終盤に差し掛かると、前も後ろも
ギャップが開きポジションは8位のまま動かし
がたくなった。

結局、8号車はNSX-GT勢の最上位となる8位
でフィニッシュしポイント獲得を果たした。
上位争いに加わることはできなかったが、
随所で速さは見せた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



星「お疲れ様でした、8番手です」

伊沢「ちょっと点数的には少ないけど、次に繋がるレースだったと思います」

星「昨日の順位からここまで上がれば良かったんじゃないかと思います」

鈴木亜久里総監督も「昨日の状態から考えると格段に良くなったね。

チームが頑張って車を仕上げてくれたし、ドライバーも頑張ってくれた。

ペースもとても良かったので、次のレースに生かしたいね」と笑顔が見えた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS

Panasonic HONDA

AUTOBACS
ARTA

8
zf.com/jp

PIT-PRO

Coca-Cola

BRIDGESTONE

COMTEC
WOR

BRIDGESTONE



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



一方、55号車も72周目に最後のピットストップを終えて
シヨーンから再び高木へスイッチ。タイヤを4輪とも交換して
も、依然として2位とは20秒以上のギャップがあった。
あとはもう、敵は自分自身だけだ。思わぬ油断に足下を掬われ
ないようにだけ注意して走れば良い。
普段レース中のやりとりはエンジニアに任せ滅多に無線で口を
挟まない亜久里総監督も、思わず高木にアドバイスを送った。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

土屋「真一、集中して大事にいこう」

高木「はい、集中します！」

高木「どう？このペースでもうちょっと安全に走る？」

安藤「残り 15 周、ギャップは変わらず 26 秒。

ちょっとペースを落としても大丈夫です」

AS「走りやすいペースで走れば良いよ」

途中、周回遅れのマシンに前を塞がれる場面もあったが、慌てず騒がず、安全を第一に考えて引いた。しかし必要以上にペースを落とすとなれば油断も生じかねない。

土屋は高木の気を引き締めることも忘れなかった。

高木「モデューロ (34 号車) ってどのくらいで走ってるの？結構バトルしてるけど、抜いた方が良いのかな？ちょっと危なそうだから (ギャップを) 空けるわ」

安藤「了解、後ろとのギャップは 27 秒あります」

高木「ゆっくり走ったらタイヤカス付いちゃったよ、これ」

土屋「真一、ペースを戻そう。集中していこう」

高木「了解です。NSX GT3 はストレートが速いね、すごい！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

そして 102 周を危なげなく走り切った高木は、後続に 25 秒以上の大差を付けてまさしくパーフェクトなレースをやったのけた。それはもちろん、高木だけでなくショーンも ARTA の面々も、全員がパーフェクトな仕事をやったのけたからこそその結果だった。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



高木「ゴールしまーす、ありがとう、みんな！」

安藤「ありがとうございます！」

高木「みんな完璧だったね、ピットも速かった」

安藤「高木さんもショーも完璧でした」

土屋「真一、お疲れさん。パーフェクト！」

高木「今日はクルマが完璧でしたね、

文句の付け所がなかったです」

土屋「真一のおかげだよ、ありがとう」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

2018  **AUTOBACS SUPER**

GT500

NISSAN

'TO SUB

DRIVING

Western Digital **PRO** **MODEL by M**

ARTA **NICHIELIN** **SHAW RHA**



AUTOBACS RACING TEAM AGURI

TOBACS SUPER GT ROUND 2

500KM RFA

AN

LEXUS

TOR

ray Carbon

SPORTS

Western Digital

MICHELIN

JV

BRIDGESTONE

YOKOHAMA

AUTOBACS RACING TEAM AGURI

ARTA





岡山で見せた進化の片鱗を、55号車は富士でしっかりと見せた。

これでチャンピオンシップでも堂々のトップに立ち、王座争いに名乗りを挙げた。

8号車は8位とはいえ苦境の中でNSX-GT勢トップのポジションを確保し、今季初ポイントも拾った。

富士よりもNSX-GTに合った次の鈴鹿サーキットでは、ウェイトハンディが少ない状態で臨むことができるだけに、

8号車こそが片鱗を結果に繋げる番だ。

変貌を遂げたARTAの姿が、少しずつ露わになってきた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

ARTA

ARTA

"BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998
FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED
THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,
ING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



株式会社オートバックスセブン

ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

ZERO BORDER
Team ZEROBORDER

©2018 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD